

## 詩歌・小説の中のはきもの (第24回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

### 228 春暑し靴屋に垂れて革十色

田口彌生

★昭和20年代の東京の冬は今に比べると寒かった。建物も廃材を使ったり、錆びたトタン囲いの地味な家が多く、今と比較したら貧弱な家だったが、全てそんな家だったから貧弱とは思えなかった。人々は黒っぽい服装でうつむき加減に歩いていた。言ってみれば“灰色”の街の中の手造りの靴屋さんの店にサンプルの革が下がっていたのである。季節が春だから、明るい色の革が作者の目には花が咲いたように見え、心を弾ませたのだろう。

### 229 竹馬のように一步を踏み出せり芝生を進む初めての靴

俵 万智

★室内で達者に歩けるようになった子に靴を履かせて、転んでも怪我のない柔らかな芝生の上に連れ出したのである。すると子は広さに緊張して、足を竹馬の棒のように突っ張らせて歩き出した。西洋では親は自分の子が人生で最初に履いた靴を、ヘソの緒のように保存する習慣がある。私もそれを真似て長女の履いた靴を残して置いたが、所詮付け焼き刃、何年かあとに探してみたが靴の行方は杳としてわからなかった。

230 たとえ20何年ぶりに履いたものであっても、この靴の重さは、異常だと思う。このからだの重さも、自分の肉体に備わったものとしては、承服しがたい。意識の中に予定されたこの重さがあつたら、わたくしは、あのようにらくらくと、

この山旅の計画には乗らなかったはずである。この重さ、このだるさ、自分以外のものの、自分に加わったものでなければならぬ。その意味を、わたくしは知りたい。  
田中澄江

★『私はいつでも山に登りたい』から。昭和32年6月、49歳の田中は立山からの上高地への北アルプス縦走を試みる。登山靴の重さを感じる肉体を通して「自分」を探求する。「山に来て、山を越えて、やっぱり途中である。わたくしの人生はいつも途中である。」と実感する。田中の人生と山に重さと厚味を与えたきっかけは彼女の1足の登山靴だったと言える。

231 女性がバッグや靴が好きなことを知っているパリジャンは、妻やガールフレンドの喜ぶ顔見たさに、自分たちも婦人用のバッグや靴を研究してプレゼントする。

日本の男性がバッグや靴を愛する人にプレゼントするというのはあまり聞かないが…、パリでは普通のこと。こういうアイテムをプレゼントするには（高級ブランドである必要はまったくない）、よほどパートナーの着こなしをつね日ごろ注意深く観察していないとできないから、女性が少しでも小物づかいを楽しんでくれるよう、われわれ男たちも少しは勉強したい。  
高橋克典

★『パリジェンヌのおしゃれレッスン』から。「人にあげるものを探していたけど、これぞと思うものが見つからず、とうとう

その日がきてしまって、近所の靴屋さんに走って行って、黒革のひも靴を買いました。」(大橋歩)という文章を読んだとき、なんて格好のいい、洒落たことをする人だろうと思った。超人気のスポーツ選手や俳優たちがこんな習慣をつくってくれるといいのだが、彼らに期待できないとなったら(まだ期待しているのだが)、何がきっかけで日本の男性は恋人や妻に「はい、どうぞ」と靴をプレゼントするように変わっていくのだろうか。

232 「せめて足音だけでも置いて行ってね」と、女はいった。

「ほかには何もいらないから」

男は思い出した。アパートの古ぼけた鉄の階段を、2階まで上がるのさえ待ち達しかった頃もあったのを。岸田今日子

★『大人にしてあげた小さなお話』から。足音は時代を反映する。戦争が終わった後、軍靴が履かれていた頃は鋏の硬い音が巷にあふれた。戦後長らく紳士靴のヒールは革の積み上げで、減り止めの金具を打った踵も珍しくなかったから、「カッカカッ」といえば男靴の立てる音であった。今は婦人靴の方が「カッタカッタ」と威勢のいい音を立てる。駅の階段を3人も若い女性が行くと辺りは大層賑やかになる。古い鉄製の階段の乾いた靴音には余韻がある。

233 靴の数だけ、人生がある

★『靴に恋して』のパンフレットから。ラモン・サラサール監督・脚本のスペイン映画。盗んだ靴を履く女、偏平足の女、スリッパを履く女、スニーカーを履く女、小さな靴を履く女たちが真実の愛を求めて靴を履き替える。300足の靴が登場する。靴は履く前から物語を秘めているが、履かれた靴は「人生」(の一部)になっている。登場人物の一人が「履き心地のいい見た目のいい靴を求めて、それを選んだときに人格が完成されたのだ」というような科白を口にしたが、理想の靴にめぐり合うのは容易ではない。

234 履きだして一週間も過ぎると、先の丸い靴が気に入ったらしく、私に「もう2足、買ってきてほしい」と言った。それから2、3か月が経ったころ、「品物がなくなるといけないから、もう2足買ってほしい」と言った。同じサイズの先の丸い靴を五足買ったことになる。

森 富子

★『森 敦との対話』から。森敦は22歳で文壇にデビューし、以降40年間一篇の小説も書かず各地を放浪、62歳のとき書いた『月山』で芥川賞を受賞した。貧しい敦夫妻の生活が養女富子によって明かされる。半年ぶりの入浴で妻の身体をタオルでこすると垢のこよりができたし、新品のまま着つけ、クリーニングに出さない敦のワイシャツの襟に汚れによる波状の縞模様ができていた。そんな人が、調布の靴屋において、履き心地優先で一挙に5足も買ったのである。徹底した生き方がわかる。

235 この前新幹線で、トイレに行くついでに観察したら、同じ車両に乗っていた24人のうち、21人までが靴を脱いでいた。年齢、男女、ビジネスマンかどうかに関係はない。途中駅で目が覚め、慌てて靴を履こうとしたら、眠りながら蹴ってしまったのか片方みつからず、座席の下を探し回り、あたふたと降りていった人もいた。岸本葉子

★『結婚しても、しなくても』から。学生するとき、フランスに長く住んでいた先生が歌うようにフランス語を読んでいる教卓の下に黒い革靴の転がっているのを見て、著者は「日本人は生来、少しでも気がゆるむと靴を脱ぎたくなる因子が、体の中にインプットされているのではないか」と考える。下駄・草履などの開放性の履物は湿度との関係で生まれたものだろうが、湿度の低いヨーロッパにおいても日本人観光客は靴を脱いでいるところをみると、DNA説を全面的に否定できない。

236 内館牧子 ヨーロッパの人の歩き方と、日本人の歩き方は違うんですか。

デューク更家 違います。日本人は「平行アライメント」といって、大地に対して平行な歩き方をするんです。鳥が着地するように、フワッとおりてきて、そのままトトトッと滑らすように2本足で歩く。手を振らないで大地と平行に動く。西洋人は「直立アライメント」といって、手を振って大地を蹴るように垂直に歩きます。

★『正しく歩いて、美しく痩せる』（潮04年8月号）から。更家はウォーキングドクター。アライメントは「歩容」のことと考えていい。「正しい歩き方」というのが存在するかについては議論があるだろう。「美しい歩き方」についても同じことが言える。しかし、「正しい」とか「美しい」歩き方については製靴業界も研究し、ガイドラインを作成する時期に来ている。そんなステップを踏んだ上で、日本の靴メーカー全体の「靴機能」は飛躍的に発展するのだろう。

237 大枚をはたいて購入した本革製のブーツを三分かかって脱ぎ、冬の外気にあてられた体を一刻も早く暖めようと二重玄関の内ドアを開けると、すぐ前に母が立っており、佐奈が失踪したと云った。…

「ねえ稜子、佐奈を捜しに行ってくれないかね」

「コート脱いだばかりなのよ」稜子はすぐに云った。「それにあのブーツ、はくのに四時間ばかりかかっちゃうんだから」  
佐藤友哉

★『小川のほとりで』から。欧米の家庭にはブーツ脱ぎ器が普及している。ブーツがなかなか脱げない様子は小説の中にも時々現われるが、履くのに「四時間」というのはどのような事情からなのであろうか。いずれにせよ脱ぎ履きに要した時間を書いた作家は他にはいないので、貴重。

238 死んだ魔女の足が消えて、あとに銀の靴だけが残っています。「もう年でしたからねえ。」と北の魔女は説明しました。「太陽があたって、あつというまにひからびてしまったんですよ。これである魔女もおだぶつです。この銀の靴はあなたのものですよ。さあ、はいてください。」おばあさんは靴を拾いあげ、靴をふってほこりを落すと、ドロシーに渡しました。  
フランク・ボーム

★『オズの魔法使い（幾島幸子訳）』から。この魔法の銀の靴は、かかとを3回打ち合わせ、どこへ打きたいかを言って、3歩あるくと好きな所へ行ける。靴にこのような夢を描くのは長い靴の歴史を持つ西洋では珍しくない。子育てをしているとき、書店の児童書コーナーに行っては、日本の子供にも靴を擬人化した、夢のある名作童話がほしいと思った。